

聖憲教学の研究

大正大学大学院仏教学研究科博士後期課程三年

学籍番号 1304012

鈴木 雄 太

本論は中世期に活躍した根来の学僧、聖憲の教学を明らかにしようとするものである。聖憲に関する研究はこれまで、真言宗学では真言学僧として、華嚴宗学では華嚴学僧として、あるいは真言宗学では『大疏第三重』や『釈論第三重』に即して、華嚴宗学では『五教章聴抄』に即して、それぞれ一線を隔してなされてきた。さらに、聖憲は、真言宗学では頼諭の継承者、華嚴宗学では凝然や盛誉の一門下という位置づけに留まり、聖憲自身の教学が注目されることは少なかった。すなわち、先行研究の中で聖憲について語られる場合、真言宗学では、「頼諭の教学を大成させた聖憲」としてあくまで頼諭と比較された聖憲であり、聖憲と比較した頼諭ではない。要するに、これまでの真言宗学にとって聖憲の教学とは、頼諭の教学を受け継いだものに過ぎず、聖憲独自の教学という認識には到っていない。また華嚴宗学では、聖憲を取り上げる場合、その多くは凝然の系統としての聖憲であり、そこでの研究の主眼は凝然教学の展開にあるため、そのときの聖憲は他の門下僧の一人に過ぎない。従って、華嚴宗学で明かされてきたのは、凝然門下の聖憲が師説を受け継いでいるのか、あるいは師説と異なる主張をしているのかという部分であり、聖憲に、かつての華嚴教学ではない。このように、これまでの研究では、聖憲自身が主眼となることはなかった。さらに言えば、主眼であるか否かは別としても、聖憲を取り上げた研究自体の数が少ない。

そこで本論は聖憲を中心に据え、聖憲の教学、そして新義真言教学史における聖憲の位置づけを明らかにすることを目標とした。そのためには当然、系統的に、時代的に、聖憲と近い他の学僧との比較が必要になるが、その際、他の学僧から聖憲へという教学の受容よりも、他の学僧と聖憲の教学がいかに相違するのかがというところに重きを置き、これまであまり注目されてこなかった「聖憲の教学」を切り取ることに心を向けた。もちろん聖憲の中には、頼諭の継承者、凝然や盛誉の一門下としての側面が多分に含まれている。しかしだからといって、聖憲における頼諭からの影響、あるいは凝然や盛誉の一門下としての聖憲ばかりに目を向けていては、聖憲という一人の学僧の存在意義を見出すことはできない。本研究においてはあくまで聖憲が基点であり、聖憲を中心として他の学僧がいるということを常に念頭に置きながら考察するよう心掛けた。またできる限り、聖憲にまつわる様々な事象に対し、それぞれ一線を隔するのではなく、俯瞰的に、横断的に、立体的に捉えることを意識した。本論は五部の構成に基づくが、以下に要旨をまとめてみたい。

第一部 聖憲の事績について

第一部では、第二部以降で聖憲の教学を論じていくに先立ち、聖憲の事績と聖憲に関わる教学的系譜について整理した。

第一章では、『結網集』・『東国高僧伝』・『本朝高僧伝』といった伝記資料に基づき、聖憲の生涯を辿った。聖憲の中でも、久米田寺で『五教章聴抄』を著したことは重要な事績であり、聖憲教学が形成されるに当たって、聖憲の華嚴修学は大きな役割を果たしている。しかしながら、聖憲の伝記資料には久米田寺での修学や『五教章聴抄』撰述の記事はない。さらには、運徹をはじめ後世の真言学僧は、『五教章聴抄』の注釈や聖憲の華嚴学に対する言及をしておらず、真言宗学において、聖憲の華嚴修学はあまり注目されていないことが分かった。その一方で、近年の聖憲研究ではあまり注目されない『阿字観』が、伝記資料の中では評価が高く、後世の真言学僧から重要視される様子などが記されていることが明らかとなった。

第二章では、聖憲の著作とその概要を示し、併せて各著作の研究状況を提示した。聖憲の著作は現在七本が確認できるが、それぞれの性格を考えると、どれも初学者向けの著作といえる。聖憲の最も大きな功績は『大疏第三重』と『釈論第三重』の撰述にあると言われ、その理由は頼諭以来の膨大な論義を整理し、わかりやすくまとめあげたことにある。『大疏第三重』と『釈論第三重』の両著作は現在行われている論義においても底本として用いられており、当時から現代に至るまで新義学派の教学研鑽の中枢を担ってきた。同じように、聖憲の他の著作も初学者のために記されたものであり、ここに、聖憲の撰述に対する特徴的な姿勢が見出される。すなわち聖憲は、難解で複雑な理論を整理し、初学者、あるいは後世の学僧が理解しやすく、また扱いやすいように努めている。頼諭によって、真言の教理に関わるあらゆる問題が扱われ無数の議論がなされたことで、新義教学という新たな教学が打ち出されたことは確かである。新たな教学が確立するには、あらゆる角度から議論し尽くすことが要される。しかしながら、積み重なった膨大な議論は、同時に内容の複雑性を生じる。そのような状況を打開し、さらにはその新しい教学を後世へと伝えるために、ある意味では「頼諭の継承者に過ぎない」との評価を受けることを覚悟し、あるいはそのような評価さえも気にすることなく、聖憲は著作活動に励んだのではないだろうか。そして、聖憲のそういった想いが実を結び、聖憲の著作は、実際に今でも論義という実践の場で重用されている。ただし、聖憲の著作は初学者向けとはいえ、どれも単なる概説書にとどまるわけではなく、その中には特徴的な見解や聖憲独自の主張も見られることは言うまでもない。

第三章では、聖憲における真言宗の系譜という視点から、新義真言宗の歴史、そして第二部以降の前提となるような新義学派の教学について整理した。とりわけ、教主論（教主義）に関しては、その始まりから聖憲に至るまでの過程を振り返り、これまで取り上げられることの少なかった聖憲の教主義についても言及した。聖憲の教主義は、頼諭のそれを受け継ぐに過ぎないとして、あまり語られてはこなかった。しかし、『大疏第三重』《自証説法》》を見てみると、頼諭以来の「加持説の義」の後に、「私に云く」と自説を述べる箇所がいくつか見られた。いずれの箇所も新義学派の加持身説に基づいてはいるが、その解釈の仕方や説明の方法が頼諭とは異なり、教主義においても聖憲の独自性が垣間見えた。また、頼諭の『大疏愚草』と聖憲の『大疏第三重』の比較を行った。『大疏第三重』の百題すべてを『大疏愚草』と比べてみると、百題のうち、十八題は頼諭の見解を反覆している。『大疏第三重』は『大疏愚草』をまとめた著作と言われるが、そのすべてにおいて見解を受け継いでいるわけではなく、聖憲独自の立場がみられることが明らかになった。

第四章では、聖憲における華嚴宗の系譜という視点から、高山寺・東大寺・久米田寺の華嚴学について整理を行った。本章の多くは先行研究に基づくが、聖憲における華嚴の系譜を遡ると、久米田寺華嚴はもちろんのこと、東大寺・高山寺という日本華嚴を代表する二つの華嚴学を受容していることが確認できた。しかし、高山寺華嚴については、受容こそしてはいるものの、それを自らと同じ立場と捉えていたかは一考の余地があり、今後検討すべき課題の一つである。

第二部 聖憲に到る華嚴教学の解釈

第二部では、聖憲が重要視した華嚴教学について、華嚴宗にとって重要な三つのタームを取り上げ、それに関する聖憲の見解を検討した。

第一章では、三生成仏の視点から、中国華嚴学派、さらには日本華嚴学派における「三生成仏」解釈の展開を確認した。聖憲は三生成仏に対し、一生涯での成仏を可能とみる、華嚴学派の中でも特異な見解を示しているが、その背景には、①高山寺教学からの影響と、②華嚴と真言の成仏論を会通する意図がある、という二つの可能性が考えられる。しかしその一方で聖憲には、一乗教では必ず劫を経てから成仏するという「一乗経劫」の立場があることを挙げ、聖憲が華嚴の成仏に対し、「一生涯での成仏」と「一乗経劫」という相反する立場を持ち併せる理由について考察を行った。それには、真言にとつての華嚴という位置づけが関わっていると思われる。華嚴宗は顕密対弁として一括りに顕教の中に組み込まれることもあれば、顕教の最高位として他の顕教とは区別されることもある。このことが、聖憲の中で両立場を具える原因ではないかと指摘した。

第二章では、初発心時便成正覚の視点から、日本華嚴学派における解釈の相違について検証し、聖憲は凝然・禅爾・盛誉という東大寺や久米田寺系の学僧と同様の解釈をしながらも、華嚴の初発心時便成正覚と真言の即身成仏を同列に扱うなど特徴的な見解が見られることを確認した。しかし聖憲は、『五教章聴抄』では初発心時便成正覚と即身成仏を同列に扱うのに対し、『大疏第三重』では華嚴と真言の成仏論を混同することに注意を促しており、両著作で立場に相違のあることが明らかになった。

第三章は、事・理という視点から言及した。先の二つ（三生成仏・初発心時便成正覚）は成仏論に関するタームであったが、本章の「事・理」は法界観に関わっている。真言学派では、華嚴の「事事無礙」と真言の「即事而真」が相似していることから、両者の同異について度々議論がなされてきた。そこで問題となるのは、「事事無礙」や「即事而真」が、性相歴然という事そのものの無礙なのか、摂相帰性という理を前提とした事の無礙なのか、ということである。これについて聖憲は、真言に即する『大疏第三重』では、華嚴は摂相帰性、真言は性相歴然と説明していた。それに対し、華嚴に即する『五教章聴抄』では、天台・三乗が摂相帰性、華嚴は性相歴然と説明している。すなわち、『大疏第三重』において真言と華嚴を比較した説明が、『五教章聴抄』では華嚴と天台・三乗を比較するものとして使用されており、『五教章聴抄』において華嚴の教理を一つ高め、真言の教理へと近づけようとする姿勢が見受けられた。

第四章は本章のまとめとして、学僧としての聖憲の在り方について言及し、聖憲の立場は真言学僧にあることを論じた。第一・二・三章を通じて、聖憲は真言に即する『大疏第三重』では華嚴と真言の相違を主調し、華嚴に即する『五教章聴抄』では両者の相似を主

張していた。『大疏第二重』において真言が華嚴の上位にあるのは当然であるが、『五教章聴抄』においても主張されるのは真言と華嚴の相似であり、華嚴が真言より上位にあるわけではない。『五教章聴抄』では法藏を宗家と称し、一見すると華嚴学僧としての著作のようにも感じられる。しかしそうではなく、聖憲の立場はあくまで真言学僧にあり、『五教章聴抄』も真言学僧として、自ら学んだ華嚴の教理を真言へと近づけ、あるいはこれまで学んできた真言の知見に基づいて華嚴を解釈しようとした著作といえる。近年の聖憲に関する研究は、真言宗学では真言学僧として、華嚴宗学では華嚴学僧として、一人の聖憲に對し別々の立場から研究がなされてきた。しかし、一つの著作の中だけで聖憲の教理をみるのではなく、華嚴に即する著作と真言に即する著作の両方を通して見ることで、真言学僧として華嚴宗の兼学に励む聖憲の姿が明らかになった。

第三部 究竟の境界について

第三部は、「聖憲の究竟論」と題し、聖憲、さらには新義学派における究竟の境界について考察した。新義学派は、顕教に對する顕密對弁の時と古義に對する自宗細論の時の二つの立場を有するが、究竟の境界について論じることはこの両立場に関係している。また、加持身説という新義学派の教主義も、究竟の境界を論ずることと大いに関わっている。すなわち究竟の境界は、新義教学にとつて極めて重要な論点なのである。

第一章では、果分不可説という視点から究竟の境界について論じ、聖憲が新義学派の加持身説法を説明する際に、華嚴の果分不可説を用いていることを指摘した。また、聖憲が加持身説法と果分不可説の論理構造が相似していることを主張するのに対し、頼諭は両者の相違を強調することを指摘し、聖憲が華嚴の教理を受容し、それを真言教理の解釈へと活かそうとする姿勢が見られることを明かした。

第二章では、真言学派における華嚴の「初発心時便成正覚」解釈について論じ、新義と古義の間で解釈に相違のあることを明らかにした。古義学派が華嚴の初発心時便成正覚を分覚とみるのに対し、新義学派は究竟覚とみる。その理由として、新義学派には「顕密對弁に即する究竟」と「新古對弁に即する究竟」の二つの究竟が存することを指摘した。古義学派には究竟の境界が一つしかなく、そのために、華嚴の初発心時便成正覚を分覚と判じなければ、顕密の相違がなくなってしまう。それに対し、新義学派には究竟の境界が二つあり、對弁門の究竟覚の上に、さらに一段階高い新義独自の細論門の究竟覚があるために、華嚴の初発心時便成正覚を究竟覚(對弁門の究竟覚)と判ずることが可能なのである。また、本章で扱った初発心時便成正覚に関する議論は、『大疏第三重』等では一つの算題として取り上げられないが、このように、算題には含まれない論義の中にも新古で大きく見解の異なる議論があることが分かった。

第三章では、『釈摩訶衍論』を取り上げ、新義学派における不二摩訶衍法(不二門)と真如門の関係について論じた。新義学派は四重秘釈を用いて「自性身上的加持身説法」という独自の教主義を主張するが、頼諭や聖憲は、不二摩訶衍法や真如門の在り方をも四重秘釈と多分に関わらせ、新義独自の教理に相当させていることが分かった。また、新義学僧の『釈摩訶衍論』に関する著述態度にも触れ、『釈摩訶衍論』を主題とする著作では對弁門に即した主張に留まるのに対し、密教の経論を主題とした著作においてはそこに引かれる『釈摩訶衍論』に對しても細論門に即した主張をしていることが指摘できた。

第四章は本章のまとめとして、聖憲の究竟論について言及し、聖憲の捉える究竟の境界は「四重秘釈」と「对弁門・細論門」に大きく関わることを指摘した。新義学派は、对弁門に即したとき、顕密の相違を果分の可説・不可説に置く。しかしそれでは、「果分自体は顕密で同じなのか」という疑問が生じてくる。そこで細論門に即してみると、可説なる果分は第二重・第三重に位置づけられ、さらにその上に法身でも説くことのできない究竟の果分としての第四重が登場する。そして聖憲はこの究竟の境界について、『無相至極』と題する論義を設け、無相至極なる立場をはっきりと表明したのである。

第四部 聖憲の機根論

第四部では、『大疏第三重』『釈論第三重』の両著作から機根に関する言及を取り上げ、聖憲の機根観について考察した。

第一章では、『大疏第三重』に説かれる勝慧機・劣慧機という二類の機根観、大機・小機・結縁機という三類の機根観について、算題を跨いで整理し、そのうえで両者の関係を体系づけた。まず二類の真言機については、勝慧機を修行不要の発心即到機と無相の三密行を修する機に分ける。そして、儀軌に随って有相の三密行を修する機を劣慧機とし、劣慧機には三密行すべてを要する機と一密二密行の機がいるとする。もう一つの三類の真言機は、普門即身成仏する大機、一門即身成仏する小機、顕学位を経た後に密教に出会う結縁機にまとめられる。そこで、両者を合して聖憲の機根観を体系づけると、勝慧機と大機が一致し、劣慧機と小機が一致する。さらに、劣慧機・小機はどちらも漸機に属するが、勝慧機・大機は頓機と漸機に分けられる。また、結縁機は顕学の後に密教に出会う機であるため、勝慧機・大機や劣慧機・小機の範疇には含まれず、密教に出会った後、このうちのどれかに属することになる。

第二章は、『釈論第三重』に説かれる機根論を取り上げた。『大疏第三重』の機根論は主に密機に対するものであったが、『釈論第三重』では密機のみならず顕機についても盛んに言及されていた。本章では、聖憲が不二摩訶衍法の機根（不二機）に対し、二通りの解釈を行っていることを指摘した。すなわち、一つは中国の注釈書に基づき、華嚴の視点から不二機を円教（華嚴）に当てる釈、もう一つは空海の解釈に基づき、真言の視点から不二機を密教（真言）に当てる釈である。これについては、聖憲における『釈摩訶衍論』の捉え方が関わっていると分析した。聖憲は『釈摩訶衍論』に対し「顕密の両際を兼ねる」と述べるが、それは『釈摩訶衍論』の中には密教的思想と顕教的思想が混じり合うという意味での融合的な「顕密の両際を兼ねる」ではなく、ある面からみれば密教の著作であり、ある面から見れば顕教の著作であるという並列的な意味での「顕密の両際を兼ねる」であると考察した。また、聖憲は『釈論第三重』において、空海が引用する部分については密教的視点から論じているが、それ以外の部分は華嚴の視点、もしくは中国の注釈書の視点、あるいは一定の立場に即するのではなく、『釈摩訶衍論』本文に忠実な視点で論じていることが明らかになった。

第三章は本章のまとめとして、聖憲の機根論を概観した。『大疏第三重』『釈論第三重』という聖憲を代表する著作の中で、機根論は、聖憲の立場を主張するに当たって大きな役割を果たしている。すなわち、説法論・修行論・成仏論・行位論など、新義教学や真言教学における重要な問題と関わりながら、極めて体系的に論じられている。

第五部 新義真言教学史における聖憲の位置づけ

第五部では、頼諭・聖憲・運徹という新義（智山）学派を代表する三学僧を取り上げ、新義教学の展開を捉えるとともに、新義真言教学史における聖憲の果たした役割について考察した。

第一章では、三密具闕の視点から検討した。《三密具闕》はこれまで頼諭と聖憲の間で見解の異なる論義と言われ、頼諭が三密双修の立場を取り、聖憲が一密二密の立場を取るとされてきた。確かに、初重・二重までの問答を見ると、両者の解答は異なっている。しかし、三重以降まで詳しく内容を検討すると、両者の解答はその内容自体に相違があるわけではなく、強調したい部分が僅かに異なるのみであるということが分かった。ただしこのことは、裏を返せば、同じ内容であるにも関わらず、異なる視点を強調する必要があったということである。そこには、頼諭によって端を起した新義教学が浸透しはじめ、古義学派との教学的相違を打ち出さなければならぬ、聖憲の生きた時代背景が関わっているように思われる。

第二章では、阿字本不生の視点から新義教学の展開を追った。これまで阿字本不生については、一括りに古義系は表徳的解釈、新義系は遮情的解釈をすと言われてきた。しかし三者の見解を細かくみると、一概には括れず、頼諭と聖憲は表徳的解釈、運徹は遮情的解釈をしていることが分かった。さらには、運徹も表徳的解釈を真つ向から否定するわけではなく、やみくもに「密教Ⅱ表徳」と主張することへの忠告であることが明らかになった。また、三者の見解を四重秘釈に即してみると、頼諭は第四重と三重以前の関係性は論じるものの、第一・二・三重の関係については論じていない。一方で聖憲は、第二重と第三重との関係性を語っている。そして運徹は、第一重と第二重・第三重の連続性を主張する。すなわち、頼諭↓聖憲↓運徹という新義教学の展開を辿ることで、第一重から第四重まで、すべての関係性を知ることができ、新義教学は、頼諭から聖憲を経て、運徹へと相承する中で、整理され、深化され、体系化されていく様子が明らかになった。

ここまで各部の要旨をひと通り示したが、最後に、新義真言教学史における聖憲の意義を述べてみたい。

序論でも述べたように、聖憲は真言教学において極めて重要な学僧であるものの、その教学、さらには聖憲という人物そのものにスポットライトが当たることが少なかった。筆者は序論において、聖憲に対する「頼諭の継承者として新義教学を大成させた」というこれまでの評価を批判的に検討した。なぜなら、頼諭の継承者という面ばかりに注目が集まり、新義真言教学史において、聖憲は常に頼諭の陰に隠れてきたからである。聖憲の教学に焦点を当てずに、あるいは『第三重』の著作的性格のみで、単なる頼諭の継承者と評することは妥当ではない。『第三重』を含めて、聖憲の著作を丹念に検証すれば、そこには特徴的な見解や独自の教学が確かに存在するのである。その一つとして、華嚴教学の受容が挙げられる。『五教章臆抄』では華嚴と真言の会通を試み、『大疏第三重』では華嚴の教理を用いて真言の教理を説明していた。華嚴の受容のみならず、この他にも、聖憲の著作には聖憲独自の特徴的な見解がしばしば見出される。例えば『大疏第三重』では、百題のうち、十八題で頼諭の見解を反覆していた。

しかし、聖憲の教学を総じてみれば、確かに多くの部分は頼諭の教理を継承している。前述の通り、筆者は「頼諭の継承者として新義教学を大成させた」という聖憲への評価を、序論の中では批判的に検討していた。しかしながら、様々な事象を踏まえたくえで、改めて聖憲の教学を見つめ直してみると、「頼諭の継承者として新義教学を大成させた」という評価こそ、実は聖憲の新義真言教学史における存在意義ではないだろうかと思えてくる。すなわち聖憲は、単なる頼諭の継承者として頼諭の教学をそのまま後世へと伝えただけではなく、だからといって自身独自の教学をとりたてて主張しようと試みたわけでもない。新義真言教学史における聖憲の意義は、頼諭によって端を起し、一つの教学としては未整理で未熟であった新義教学を、体系的に、理論的に、そして後世の学僧が理解しやすいように整理し、ときには新たな解釈を付け加えながら、まさに文字通り、大成させたところにある。

すなわち、聖憲の教学に対するモチベーションは、自らの教学を主張することよりも、自らの信奉する新義教学を、よりわかりやすく、より体系的に、まとめあげることにあつた。事実、現在の新義学派で重宝されるのは、『大疏第三重』『釈論第三重』の両著作であり、聖憲の伝記資料にも、聖憲の著作が後の真言学僧の間で重要視されていた旨が示されていた。この事実こそが、新義真言教学史における聖憲教学の意義であり、聖憲が新義真言教学史に果たした役割なのである。

頼諭は、真言の教理に関わる様々な問題をあらゆる角度から議論し尽くし、教主義に代表される新義教学を提唱した。新しい教学が打ち出され、それが広く認知されるには、いくらかの時間を要するであろう。聖憲の生きた時代は、頼諭によって端を起した新たな教学を、教団の中に、あるいは他の教団に広めていかなければならない時代であった。時を同じくして古義には杲宝がおり、聖憲には新義教学を広めることが、杲宝には新義に対する古義の教学を打ち出すことが要請されていた。頼諭から少し時が経ち、新義教学が浸透しはじめた南北朝という時代は、活発に教学を論じ合うだけではなく、整った教学としてまとめあげることが求められていたのである。

そのような中で、聖憲は頼諭以降の根来の教学を整理し、深化させ、ときに新しい解釈を施しながら、自らの教学を形成した。そしてそういった背景の中で形成された教学が、「聖憲の教学」なのであり、そういった聖憲の姿勢こそ、新義真言教学史において聖憲が果たした意義なのである。

以上本論は、できる限り俯瞰的な視点に立ち、特に真言宗学・華厳宗学とで一線を隔さず、また、個々の算題を跨いで横断的に、聖憲という一人の学僧を捉えることを心がけてきた。しかし当然ながら、本論によって聖憲教学の全体像、あるいは新義真言教学史における聖憲の意義がすべて明らかになつたわけではない。さらには、新義教学についても、考察すべき問題はまだまだ無数に残されている。本論の中でも適宜示したように、聖憲における各華厳寺院からの影響、聖憲の十住心思想における華厳宗の位置づけや理解、聖憲における論義書の構造や百条選別の意図、頼諭・聖憲・運徹への教学的展開の詳細など、残された課題を挙げればキリがない。今後、俯瞰的・横断的・立体的な視点を保ち、より多様な角度から、聖憲、さらには聖憲周辺の様々な事象に迫っていくことを自らの課題としたい。